九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

紅樓夢における女人崇拝思想とその源流

合山, 究
九州大学教養部 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9750

出版情報：中国文学論集. 12, pp.84-109, 1983-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

紅樓夢における女人崇拜思想とその源流

合山　究

一

紅樓夢の主人公賈寶玉は、生まれながらにして女人崇拜者たるべき性質を擔わされていた。たとえば、彼の最初の誕生祝いに、將來の性向を占うために「試兒」の行事を行なった時、並べられた數多くの品物のうち、他の物には目もくれず、紅・白粉・釵・腕輪など、女の道具ばかりを摑んだということがまず、そのことを象徴的に示している。その後、次第に長じても、そのような性癖は相變らずで、勉強するにも女の子が相手でないと、頭がぼんやりして身が入らぬと放言したり（第二回）、白粉や紅を弄び、口紅を食べ、赤いものを愛好するといった一種のフェティシズム的行爲をなしたり（第十九回）、父親から折檻され笞打たれた時など、痛さに我慢ができなくなると、「お姉さま」とか「妹よ」とか叫ぶと、痛みも遠のくばかりか、快感すらおぼえるという嗜虐的性向を有していたり

すること（第二回）など、その性格は改まらなかった。このような寶玉は、小者の茗烟が、彼の日頃の口まねをして、「若様も來世では女の子に生まれ變られ、あなたさまがたとご一緒にお暮しになられますように。そして二度とふたたびこのような鬚眉の濁物に生まれついたりしませぬように」と、女神に祈っていることからもわかるように（第四三回）、つねづね女の子になりたいという願望を、心底から持っていたのである。そういういみでは、賈寶玉は一種の性的倒錯者、あるいは異常なまでの異性志向者であったということができるかもしれない。

このように作者は、主人公の賈寶玉に、生まれながらにして女人崇拜者たるべき、ある種の痴呆的特質（情痴情種）を具備させたのであるが、このような情痴情種であればこそ、鞏固な男尊女卑の時代において、驚嘆すべき女人禮贊の言葉を發し得たというわけである。

(1) 女の子の身體は水でできているが、男の身體は泥でできている。ぼくは女の子をみると、氣持がさっぱりするが、男をみると、とたんに鼻もちならない濁臭を感じるのだ。（第二回）

(2) この「女の子」という言葉は、非常に貴く、非常に清淨なものだ。かの阿彌陀（あみだ）さまとか元始天尊（げんしてんそん）さまとかのご名號などよりも、ずっとずっと尊い、絶對的なものなのだ。お前たちのそんな汚ならしい臭い口で、この言葉を決して使うではないぞ。よいな。ただどうしても言わねばならぬ時には、必ずその前にきれいな水か香りのよいお茶で口をゆすぐんだぞ。もしそれを忘れてうっかり言おうものなら、すぐにそいつの齒を引っこ抜き、顎（あご）に風穴をあけてやるからな。（第二回）

(3) 天はもともと人を萬物の靈長として生んだけれども、およそ山川日月の精氣はただ女の子にのみ鍾（あつ）まり、男ど

もはせいぜいその殘りかすか、濁ったあぶくにすぎない。（第二十回）

(4) 老天よ、老天よ。あなたはどれほどの精華靈秀をお持ちになられて、これら「人の上なる人」（美女たち）をお生みになられたのでございますか？（第四九回）

(5) 實にこの天地の間の靈氣は、ことごとくこれら女子の上に鍾まっているとみえる。……それに較べたら、われわれは、所詮一個の濁物たるにすぎない。お祖母さまの子孫なのに、だれもあの子（鴛鴦）におよぶ者はいないではないか。（第百十一回）

これらの言葉を寶玉が發するとき、その前後いずれかに、作者は必ず、この種の發言が彼の正常ならざる痴呆的性質に由來するものであることをことわっている。しかし、これはもちろん、一種のカムフラージュであって、本心からのものではなかろう。封建社會の倫理をくつがえすような余りにも大膽な女性贊美の發言であるがゆえに、作者は寶玉の痴呆的性質に托して述べねばならなかったのであろう。

さて、このような寶玉の世にもまれな女人崇拜は、先に引用した彼の言葉をみればわかるように、單なる異性崇拜によるものではなく、同性に對する異常なまでの憎惡をうちに含んだもの、つまりその反動として現われているのである。寶玉によれば、少女たちは、天地秀靈の氣をうけて生まれたこの上もなく「清爽」・「清淨」なものであるが、逆に男性は「天地の氣の殘りかすか、濁ったあぶくでできた」俗臭ふんぷんたる「濁物」である。あるいはまた、女人は美しい「水」でできているのに對して、男性はきたない「泥」でできたものである。そうして、このようなこよなく美しい存在を、損ない臺なしにしてしまう張本人は、「鬚眉濁物」たるむくつけき男どもである。

(6) せっかく申し分のない清浄潔白な女の子でありながら、名譽をむさぼる連中のまねをして、國賊や祿ぬすびとの仲間入りをするなんて！これもつまりは昔の人が、後世の鬚眉の濁物どもを導くために、余計なものを作り出し、なんだかんだともっともらしいことを言ったせいなのだ。男に生まれたぼくの不幸はともかくとしても、女の子たちまでがこの風習に染まり、あたら天地の靈秀を鍾めた德に負くことになろうとは！（第三六回）

このように賈寶玉は、男性と男性的社會での價値觀とを否定するのであるが、男であるということからすれば、寶玉自身もまた「濁物」たるをまぬがれず、彼はしばしば自らを「鬚眉濁物」・「怡紅院濁玉」（第七八回）などとよんで、卑下している。たとえば、「天がこのような人（芳官）を生んでいる以上、どうしてぼくみたいな鬚眉の濁物がこの世界をけがすことがあろうか」（第五八回）というがごとくである。賈寶玉は常日頃このように謙遜して彼女たちと交わっているのであるが、彼のこのような自己卑下には、自分だけはなんとしてもそのような濁物にはなりたくないという強い願望が含まれていることはいうまでもなかろう。

さて、寶玉はこのように殆んどの男性を、身心ともに不淨な唾棄すべき「濁物」とみなしているのであるが、それでは女性はすべてすばらしい存在であると考えているかというと、決してそうではない。溫柔・雅麗・聰明・純粹な美質を備えた少女も、いったん結婚すれば、男どもの濁氣に汚され、臭氣に染まって、次第に駄目になってしまうというのである。たとえば、「女の子がお嫁に行かぬうちは、非常に高價な寶珠のようなものだ。ところが一旦嫁に行くと、どうしたわけか、よくないところがたくさん出てきて、珠ではあっても、光も色つやもなくなって、死んだ珠になる。」（第五九回）というがごとくである。このように彼の女人崇拜は、徹底した處女崇拜であり、少女

崇拜なのである。このような女性觀が、近代的な女權擴張論者、すなわちフェミニストの立場からみたとき、果して本當の意味の女性尊重に當るかどうか、大いに問題があると思われるが、それについては後章において觸れることとし、ここでは以上みてきたような賈寶玉の言葉が男尊女卑の封建社會にあって、はっきりと女人を崇め、男性をおとしめたという點において、まさに「驚くべき發言」であり、「破天荒のこと」であったと、從來からみなされているということだけを指摘しておきたい。(1)

二

それでは、紅樓夢におけるこのような女人崇拜の觀念は突如として現れたものであろうか。いま述べたようにふつう一般には、作者の曹雪芹が創造した破天荒の思想であるかのようにいわれているが、果してその通りであろうか。いな、私が思うに、それは決して無から有を生ずるように突發的に生まれたものではあるまい。中國の多くの小說が、題材・思想・表現などにおいて、しばしば來源や典據をもっているように、紅樓夢の女人崇拜思想にもやはりそれ以前に源流があるのではないか、そしてそれらの女人崇拜の思潮が、漸次進展を遂げながら、紅樓夢に流れこみ、その結果先にみたような瞠目すべき發言となって現れたのではないか、と考えられる。

小稿は、紅樓夢の女人崇拜思想の源流をなすそれ以前の思潮について考察することを目的とするものであるが、そのためにはまず手はじめとして、先に引用したような賈寶玉の大膽な發言が、どのような來源や典據をもつものであるかについて檢討することからはじめたい。

では、かの有名な水（女性）と泥（男性）の比喩（引用(1)）は、どこから來たのであろうか。これについて、私はその典據を見出すことができない。おそらく、「水之性清、而土壤汨之」（孔叢子、抗志）、「水之性欲清、沙石濊之」（文子、道原）などという言葉からも想像されるように、水はあくまでも清淨なるもの、泥は反對にきたないものの代表であるところから、「清淨」なる女子の象徵として「水」を、「濁物」たる男子の象徵として「泥」を、對比的に用いたにすぎないのではないかと思う。女性を「禍水」・「水性」などといって貶しめる言い方があるが、その「水」とは關係あるまい。おそらくこれには、はっきりした典故となるべきものはなく、作者が肆意的に作り出した言葉であろうと思われる。

この「水」と「泥」の比喩は、その奇拔さのゆえに、きわめて人口に膾炙しており、紅樓夢の女人崇拜思想を語るとき、最も口の端にのぼりやすいものであるが、しかしこの種の表現は、紅樓夢中にはただこれ一回きりしか用いられておらず、いわば賈寶玉の偶發的放言ともみなすことができるかもしれない。それよりもむしろ、さらに本質的に重要とみられるのは、女性が天地秀靈の氣を鐘めて作られているのに、男子は余りものの濁氣によって作られているという言葉である。前章引用の(3)、(4)、(5)、(6)がそれである。この種の言葉は紅樓夢中にこのようにしばしば見られ、確固たる思想として定着しているかのようである。しかしてまた、よくよく考えてみれば、この言葉自體も、水と泥の比喩に劣らず、男尊女卑の時代においては、驚くべき發言であるといわねばならない。水と泥の比喩も、このような思想が基盤にあればこそ、現われ出たものであるとさえいえるかもしれない。

では、女性が天地秀麗の氣を享けて生まれたのに對して、男子は殘りかすで出來ているという思想は、曹雪芹の

創造したものであろうか。いな、こちらの方には來源があり、これと相似た言葉が、紅樓夢以前にしばしば唱えられているのである。それは、「天地秀靈の氣は、男子に鍾まらずして、婦人に鍾まる」という言葉であるが、たとえば管見の及ぶかぎり、次のような用例があげられる。

明の崇禎元年（一六二八）刊の「古今女史」二十卷の趙世杰の序には、

降是而隋唐以迄近代、登之木、付之剞劂、而後授墨、詩文于是遂徧于四海。輶軒之使、又或爲之甄錄、海内靈秀、或不鍾男子而鍾女人、其稱靈秀者何？蓋美其詩文及其人也。

崇禎五年（一六三二）刊の「續玉台文苑」四卷の葛徵奇の序には、

非以天地靈秀之氣、不鍾於男子、若得宇宙文字之場、應屬乎婦人。每於秘帙殘書、得寸牋猶同寸璧、玄談雅集、獲新語如息新知。

明末清初の人、鄒漪の評選にかかる「紅蕉集」二卷の彼の自序には、

抗遜機雲沒、而乾坤清淑之氣、不鍾男子、而鍾婦人。難言哉。顧予歷覽古今、閨閣之傳與否、亦有幸不幸焉。

明末の馮夢龍編の「情史類略」二十四卷には、その卷四情俠類の末尾に、編者の總評があり、次のようにいう。

情史氏曰、豪傑憔悴風塵之中、鬚眉男子不能識、而女子能識之。其或窘迫急難之時、富貴有力者不能急、而女子能急之。至于名節關係之際、平昔聖賢自命者、不能周旋、而女子能周全之。豈謝希孟所云、光岳氣分、磊落英偉、不鍾於男子、而鍾于婦人者耶。

明末の小說集である「醒世恒言」の卷十一「蘇小妹三難新郎」には、

有等聰明女子、一般過目成誦、不教而能。吟詩與李杜爭強、作賦與班馬鬪勝、這都是山川秀氣、偶然不鍾於男而鍾於女。

「儒林外史」の作者吳敬梓の親友とみられる無名氏評、臥閑草堂刊本「儒林外史」の第十一回「魯小姐制義難新郎……」の回評には、(2)

嫻于吟咏之才女、古有之。精于擧業之才女、古未之有也。……陸子靜門人云、英雄之俊偉不鍾于男子、而鍾于婦人。作者之喩意、其深遠也哉。

以上のような例からもわかるように、「天地秀靈の氣は、男子に鍾らずして婦人に鍾まる」という言葉は、明末以後、女子の文才氣節などのすばらしさを語るときの殺し文句として、しばしば用いられていることがわかるであろう。この言葉は、明末以後における女人崇拜思想の台頭を端的に表明するものであるとともに、私は紅樓夢における女人崇拜思想の基盤をもなしていると思う。なぜなら、前章引用の(3)、(4)、(5)、(6)にみえる賈寶玉の發言は、あきらかにこの言葉をふまえたものであると考えられるからである。

三

ところで、「天地秀靈之氣、不鍾於男子而鍾於婦人」という言葉の出所は、どこにあるのであろうか。右の引用文中に、謝希孟云うとあるが、謝希孟なる者は一體どのような人物であろうか。これについて調べてゆくうちに、彼が明末以後の文獻にはかなりなじみ深い人物であることがわかった。たとえば、田汝成の「西湖遊覽志餘」(第十六

卷）には、謝希孟に關して、次のような記事がみえる。

謝希孟者、陸象山門人也。少豪俊、與妓陸氏狎、象山責之、希孟但敬謝而已。他日復爲妓造鴛鴦樓、象山又以爲言、希孟謝曰「非特建樓、且爲作記」。象山喜其文、不覺曰、「樓記云何」。卽占首句云、「自遜抗機雲之死、而天地英靈之氣、不鍾於男子、而鍾於婦人」。象山默然、知其侮也。一日、希孟在妓所、恍然有悟、忽起歸與、不告而行。妓追送江滸、悲戀而啼、希孟毅然取領巾、書一詞與之云、「双槳浪花平、夾岸青山鎖。你自歸家我自歸、說著何如過。我斷不思量、你莫思量我。將你從前與我心、付與他人呵。」

これによれば、謝希孟は陸象山の門人で、年若く豪俊な人物であった。妓女の陸氏と狎れあい象山に叱られたが、彼はただ謝まるばかりであった。その後彼はまた妓女のために鴛鴦樓という家を建ててやったので、象山はまた小言をいった。すると希孟があやまっていうには、「樓ばかりではなく、記まで書いてやりました」と。象山は彼の文章を好んでいたので、おぼえず「樓記はどんなものかね」とたずねたところ、すぐさま彼はそのはじめの句を口ずさんでいった。「（何）遜・（張）抗・（陸）機・（陸）雲の死してより、天地英靈の氣は、男子に鍾らずして婦人に鍾まる」と。象山はこれを聞くと、自分が侮られたのだと思って、默然とした。その後、希孟は、ふと悟るところがあって改心し、故郷へ歸っていった。追いすがって啼き慕う妓女に對して、彼は毅然として離別の詞を賦し與えて去っていった——というのである。彼が妓女を捨てた後半の話はともかくとして、彼が恩師の陸象山に向って言い放った言葉が、長い年月をへて、明末になってから、俄かに人々の注目を引くこととなったのである。

この逸話は、いま述べたように、明末以後の文獻に時折引用されている。右の「西湖遊覽志餘」（卷十六）の記事

の外にも、たとえば、「情史類略」（巻五、情豪類）に、殆んど同じ文章で載っており、また「五雜組」（巻十六）には、象山が彼の記の文章を聞いて默然としたというところまで、これまた殆んど同文で載っている。さらにまた、清初の錢尙濠の「買愁集」（巻二）には、別れかねて悲傷慟哭する妓女に彼が與えた離別の詞が載っており、その妓女は彼の詞を得て入水自殺をとげたという話が付加されている。紅樓夢以前において、私の管見の及んだ謝希孟に關する記事は、以上の四つであるが、これからみても、この話が明末以後かなり一般に知られていたことが窺われるであろう。

それでは、これらの記事の據となったおおもとの出所は、どこにあるのだろうか。私もしばらく分からなかったが、後世の謝希孟についての記事に付された引用書名から[3]、この逸話の出所が、宋の龐元英の「談藪」であることがわかった。「談藪」には、後半部に、謝希孟が同郷の陳伯益と調戲（からかい）を善くした話が付加されているが、前半部のこの逸話に關しては、最初の部分に多少字句の異同がある外は、内容的には殆んど同じである。「談藪」の記事の最初の部分は、「謝希孟、在臨安、狎娼陸氏、象山責之曰、士君子乃朝夕與賤娼女居、獨不愧于名教乎、希孟敬謝、請後不敢」となっている。

ところで、龐元英の「談藪」一巻は、宋の左圭の「百川學海」（戊集）、元の陶宗儀の「說郛」（第三一）などの叢書類に收錄されてはいるものの、この話自體がそれ以後、明末に至るまでに、單獨で引用されている例を、私は見出しえない。おそらく、道學的氣風の強かった宋元時代においては、謝希孟の逸話は殆んど人々の注目を引くことはなかったのではないかと思われる。というのは、彼の言葉は、大儒陸象山にたてついた失禮きわまりない暴言と

みなされても仕方がないほどのものだったからである。むしろ宋元時代におけるこの話のとりえは、後半の部分、すなわち娼妓にうつつをぬかしていた者が、敢然と立直って立派な學者になったというところにあったと思われるのである。ところが、情性の解放された明代末期になると、前半の部分、なかんずく「天地英靈之氣、不鍾於男子而鍾於婦人」という言葉が俄かに脚光を浴びはじめ、謝希孟は一躍風流人にみたてられたのである。そしておそらく、當時の人々にとっては、彼が發心して歸郷し、追いすがる妓女を捨て去ったという後半部の插話は、むしろなくもがなと思われたことであろう。

人間が萬物の靈長として、天地の秀氣を享けているという思想は、古くから存在する。たとえば、書經に「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」（泰誓上）とあり、禮記に「人者、其天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也」（禮運）とあり、易繫辭傳上に「精氣爲物」といい、その疏に「陰陽精靈之氣、氤氳積聚而爲萬物也」というがごとくである。しかしながら、それが一段と普遍的な思想として普及したのは、宋代以後、天人合一思想の發展にともなって、天と人との相關關係がより深く追究されるようになってからである。たとえば、二程遺書卷十八に「人乃五行之秀氣、此是天地清明純粹氣所生也」といい、朱子語類卷四に「就人之所稟而言、又有昏明清濁之異、故上知生知之資、是氣清明純粹、而無一豪昏濁」などというように、人間は萬物のうちでも、とりわけ天地の秀氣を多く享けて生まれたものであり、その人間のうちでも氣の昏明清濁によって人品に差違ができる、という思想が、一般的な考え方として定着するのである。だがしかし、このような考え方もおそらくはそれまでであったろう。謝希孟のように、「天地秀靈之氣、不鍾於男子而鍾於婦人」などと放言する者は、おそらく宋元時代には他にはいなかっ

たであろう。よしんばいたとしても、ふつうには黙殺されるのがおちである。なぜなら、人間のうちでも、男のほうが女よりも天地清純の氣をより多く享けたすぐれた存在であることは、疑うべくもないことだと考えられていたからである。やはり、この言葉が注目をあつめるためには、道學的思想の束縛から情性が解放され、多くの點で從來の價値基準の轉倒をみた、明代末期をまたねばならない。

ついでに謝希孟なる人物について、簡單につけ加えておくと、彼は台州黄巖の人。原名を希孟というが、のちに寧宗の諱を避けて、名を直、字を古民に改めた。謝克家の曾孫、謝伋の孫で、淳熙十一年（一一八四）の進士。太社の令をへて、嘉定十五年（一二二二）に嘉興府通判になったという。先の記事には、陸象山の弟子となっていたが、「陸子學譜」にはその名をみない。宋元學案補遺巻五五によれば、葉適の水心學案に入っており、葉適は彼のためにその祖父謝伋の文集の序文を書き與え（水心文集巻十二、謝景思集序）、また「送謝希孟」詩（水心文集巻七）を殘している。彼については先きに引いた龐元英の「談藪」にも調謔を善くし、友人と相當ひどいことを言い合ったことが記錄されているが、「宋人軼事彙編」（巻十六）に引く「林下偶談」には、陳亮と妓席でささいなことから喧嘩をおっぱじめたことが記載されており、また、すでにみたように陸象山の叱責にも平然としているところなどをみると、かなり放膽豪宕な人物であったようである。彼のことは正統的な傳記資料には殆んどあらわれていないが、しかしまた彼の人となりについてこれ以上追究しなければならぬほどのこともあるまい。なぜなら、明末以後の女人崇拜の思潮に大きな意味をもったのは、彼の經歴や人となりではなく、彼が偶然言い放った先きの言葉なのだからである。

四

明末以後，謝希孟の言葉が一種の流行語となったことは、すでに引用した例からもわかるが、さらに深くその源流をたずねるために、ここでは紅樓夢以前にあらわれた「天地秀靈の氣を鍾めて云々」といった類似表現を擧げることにしよう。この種の表現が、とくに女性をほめる時などにしばしば用いられるようになったのは、やはり明末以後であるが、これらが謝希孟のさきの言葉に觸發されて生まれた表現であることは、ほぼまちがいあるまい。これらの中には、「天地秀靈の氣を鍾めて云々」とだけいって、「不鍾於男子、而鍾於婦人」という言葉のないものもある。しかし、そこまであからさまに斷言しなくとも、謝希孟の言葉が下敷きにあるのだから、「天地秀靈の氣云々」とだけいえば、それ以下のことはあえて言うまでもなく暗默のうちに了解されたものと思われる。とくに、佳人才子小說などで、女性の主人公を形容するとき、そのような表現が半ば常套的に用いられているが、これらにおいては、「不鍾於男子、而鍾於婦人」とまで言い切ることはできないのである。なぜならば、佳人才子小說には才子という男性の主人公もいるのだから、男性を極端にいやしめるような表現は適當でないからである。そのようなわけで、「天地秀靈の氣を鍾めて云々」というような類似表現もまた、謝希孟の言葉と全く同樣に、紅樓夢の女人崇拜思想の源流をなすものであるとみることができるであろう。まず小說よりその例を拾うと、

清初の天花才子の「快心編」（二集第九回）には、

今夫天地間女子、生而奇秀明娟、乃山川靈氣所鍾、決非漠然而生、有等遇君王選擇、或爲名公才宗所娶、則顯

著當時、膾炙人口、後世皆知其美、爲千秋佳話、……又寧知天地鍾靈之物、爲之深惜護持哉。

同じく清初の荻岸山人の作とされる「平山冷燕」には、

（天子）因顧山顯仁道、「先生生如此閨秀、自是山川靈氣所鍾、人間凡女、豈可同日而語。」（第一回）

至若班姬之管、千古流香、謝女之吟、一時擅美、此又閨閣之天生、而添香奩之色者也。此蓋山川之秀氣獨鍾、天上之星君下降、故心爲錦心、口爲繡口、構思有神、抒腕有鬼。（第八回）

天地既以山川秀氣盡付美人、却又生我輩男子何用？我前日題庵壁詩、說「脂粉乏端汚墨池」、他今日畢竟題詩譏我、想她慧心之靈、文章之利、針針相對、絕不放半分之空、眞足使人愛殺。（第十六回）

同じく清初の張匀の「玉嬌梨」には、

這紅玉生得姿色非常、眞是眉如春柳、眼湛秋波、更兼性情聰慧……果然是山川所鍾、天地陰陽不爽、有百分姿色、自有百分聰明。（第一回）

白髮詩翁吟不就、紅顏閨女等閑題、始知天地山川秀、偏是蛾眉領略齊（第一回）

美如冠玉、潤比明珠、山川秀氣眞萃其躬、錦綉文心有如其面。（第四回）

同じく清初の無名氏「人中畫」（風流配）には、(4)

這個女兒好文才、若是做個男子、定要中舉中進士做官、……「你莫要輕看了你女兒、他是一個女中才子、異日定有高人來訪求、若誤嫁了村夫俗子、便令山川秀氣無靈了」（第二回）

今見小姐、方知山川秀氣、不獨鍾於一人、自悔枋榆之妄。（第三回）

同じく清初寫刻本の「合浦珠」の序には、

才子名姝、俱毓山川之秀氣、故以芝蘭爲性、琬琰爲才、至其相慕之殷心同胶漆。

同じく清初の無名氏「定情人」には、

夫人鍾山川之秀氣、生臺閣之名門、珠玉結胎、冰霜賦骨、閨才傾絕代、懿美冠當時。（第十六回）

私の知見の及んだ小說類は僅かであるが、それでも右のごとく多くの例が擧げられる。而してこれらはみな佳人才子小說である。佳人才子小說は、周知のごとく紅樓夢の作者の貶すところとなっているが、しかしながら女性（佳人）を天地秀靈の氣を享けた存在であるとして褒賞する點では、紅樓夢と共通する面もあったのである。

さて次に、小說以外の文獻で、私の管見の及んだ例を擧げることにしよう。みな斷片的なものであるが、たとえば、明末の鄒迪光は、「自昔花姨月姊一種妖冶妙麗之氣、結而爲人、而有夷施毛嬙之屬」（始青閣稿卷十一「王脩微閒草序」）といっている。また、明末の李清は、「蓋聞天地秀美之氣、蓄則必洩、其鍾于男、而爲腹錦吻藻、與鍾于女、而爲顏朱睟綠、皆鮮色也。然才子不出世、而佳人難再得、有同感焉」（冰雪携小品所收「六妖姊妹論」）といっている。あるいは明末の衛泳は、「天地清淑之氣、金莖玉露、萃爲閨房、遇之者、若前世」（悅容編）といっている。あるいはまた胡文楷の「歷代婦女著作考」には、次のような用例がみえる。すなわち、明末の王百穀は、「六代精英、鍾其慧性、三山靈秀、凝爲麗情」（馬守貞「湘蘭子集」の序）といい、同じく錢希言は、「當是香銷南國之後、山川淑氣、蕭索輪囷、待靈人而復開耳」（徐媛「絡緯吟」の序）といい、同じく沈宜修は、「朝嵐夕景、殆盡收之湖、而湖之秀又盡鍾於媛者歟」（周慧貞「剩玉篇」の序）といっている。さらに擧げれば、明末清初の王端淑（字玉映、王季重の

女）は、「天地清淑之才、不專于丈夫、而半屬于女工」（吟紅集『玄華子同秋詩選』序）といっている。

以上あげた例は、紅樓夢以前において、天地秀麗の氣をうけた女性が、とりわけすぐれていることを述べたものである。あえて男性にまさると強調しなくとも、先に述べたように、言外の意が暗黙のうちに傳わったであろうし、またこの時代には、かかるすぐれた女性は、すぐれた男性と對等であるとする考え方が、すでに普遍的なものとなっていたのであるから、その必要はなかったであろう。でなければ、佳人才子小說などは現われようもないからである。

五

以上主として、「天地秀靈之氣、不鍾於男子而鍾於婦人」という言葉を通して、紅樓夢以前における女人崇拜思想の源流をさぐってきたが、この言葉の流行に象徵されるように、明末以後、全般的な社會思潮としても、女性に對する認識評價が急速に高まり、學問・材質などいろいろな面で、男性もかなわないものがあるという雰圍氣が次第に釀成されてきた。たとえば、女子教育がさかんになり、女流文學がめざましい發展をとげ、男性に劣らぬ女流詩人がおびただしく輩出したこともその一つであり、また一流文人と對等にわたりあえる「佳人」や「名妓」が數多くあらわれ、非常にもてはやされたこともその一つである。あるいはまた陳繼儒の「女子無才便是德」（「安得長者言」）という言葉が、侃々諤々の論議をよび、これについて多くの批判者が現れていることも、實際にはもはや「女子無才」では通用しない時代になっていたことを示すものといえよう。明末の思想家李贄は、「答以女人學道

爲見短書」（焚書卷二）において、「人に男女ありと謂えば則ち可なり。見に男女ありと謂えば則ち可ならんや。見に長短ありと謂えば則ち可なり。男子の見盡く長じて、女子の見盡く短なりと謂えば、また豈に可ならんや」といっているが、道を學ぶことにおいてすら、男女の性別が問題にならぬというのであるから、詩文においてはなおさらであろう。少なくともこの時代には、詩を作れないような女人は、まことの「佳人」とはみなされない情勢になっていたのである。紅樓夢には、才學ともに男性をはるかに凌駕する天才少女が數多く登場するが、このような世界が構想され、女人崇拜の思想が形成される背景には、いまのべたような明末以後の女人尊重の思潮が、社會の底流として存在したことも知らなければならない。

そのことを知るために、ここでは、明末以後にあらわれた女子を褒揚した言葉、すなわち學問材質などにおいて、女子が男子にまさるといった表現を列擧することにした。

明末の文人湯顯祖（一五五〇～一六一六）の「旗亭題詞」（湯顯祖詩文集卷三三）には、

獨恨在宋無所短長於時、有以自見、使某氏之俠烈不獲登於正史、而旁落於傳奇。雖然、世之男子不能如奇婦人者、亦何止一董元卿也。

明末萬曆刊本の「名媛詩歸」三六卷の鍾惺の序には、(5)

盧眉娘十四能于尺絹繡靈寶經、字如粟粒、點畫分明、……嗟乎、男子之巧、洵不及婦人矣。其于詩賦、又豈數數也哉。然此非予之言也。劉彥和之言也。

明末の鄭元勳（超宗）は、范文若の戲曲「鴛鴦棒」に題して（「鴛鴦棒題詞」）、次のようにいう。

覽薛季衡、錢媚珠事、使人恨男子不如婦人、達官不如乞兒、文人不如武弁、其重有感也夫。

「情史類略」（巻十六）の「散樂女」の評語には、

漂母而下、數百年又得散樂女、彼鬚眉男子、擁素封而坐視人飢寒者、視玆婦能不愧死。

明末の小説集「警世通言」などには、しばしば次のような言葉がみえる。

「有智婦人、勝如男子」（今古奇觀第二八巻、警世通言巻二五、同巻三一）

「有志婦人、勝如男子」（警世通言巻二、同巻三一）

明末清初の錢謙益は、當時の女流詩人（王微・楊宛）を賛めて、「不服丈夫勝婦人、昭容一語是天眞」（牧齋初學集巻一七「姚叔祥過……戲作絕句十六首」其十一）とうたうが、また「有學集」巻四七（「明媛詩緯」跋）にも、

玉映（王端叔）以名家之女、擅絶代之姿、……呂和叔昭容書樓歌曰、自言文藝是天眞、不服丈夫勝婦人、悠悠古今、同斯永歎矣。

清初の王相の母、劉氏著の「女範捷錄」には、

「治安大道、固在丈夫。有智婦人、勝於男子」（智惠）「經濟之才、婦言猶可用」（才德）

清初の書簡選「尺牘新語」巻二四閨閣序目には、編者汪淇（象旭、澹漪）の次のような序がある。

夫女之異于男者、徒以其形質耳。若夫書盤織錦之才、挽車擧案之操、斷臂投崖之節、突圍討叛之勳、何一甘出男子之下。……吾嘗謂、女子不好學則已。女子而好學、定當遠過男子。何也、其性靜心專而無外務以擾之也。

清初の張潮の「心齋聊復集初集」（「閨訓十三篇序」）には、

女子讀書、其聰明頴悟、往往高出男子十倍。蓋其精神專壹、故口一成誦、卽能歷久不忘。惜乎可讀之編、十無一二。卽以四子論、微者爲性命之旨、顯者爲治平之略、均於女子無裨也。

これらは、私の管見の及んだ、女子の才學材質などが男子に劣らぬことをはっきり述べた例である。とくに最後の二例は、現代のわれわれでさえ、なかなか言い及ばぬことを、實にあざやかに述べている。それというのも、たしかに當時においては、このような發言を裏付けるに足る才女輩出の背景があったからであろう。文學作品を通してみても、たとえば、徐渭の戲曲「女狀元」は、五代の黃崇嘏の故事を發展させたもので、男裝して科擧に應じた女子が、堂々狀元に及第するという話である。これとても、あるいはこんな事もありうるかもしれないという感じを當時の人に抱かせるものがあったからこそ、このような作品が生まれたのであろう。また今古奇觀三十四話「女秀才移花接木」は、進士及第の二人の才子に勝るとも劣らぬ同窓の俊秀が、實は男として育てられた女子であったことがわかり、いろいろな曲折を經て、めでたく一方と結ばれるという話である。さらにまた「儒林外史」第十一回「魯小姐制義難新郎」には、八股文で新郎をこまらせる才女の話が載っている。これらは戲曲や小說ではあるが、このような題材がこのんでとりあげられることからしても、女子の聰明が男子にまさるという言葉が、あながち過褒であるとはいえない情況が生まれていたものと考えられる。

紅樓夢において、男子をはるかに凌ぐ才能を賦與された女子たちが活躍するのも、明末以後にこのような氣風が醸成されていたからであり、また曹雪芹が甲戌本「脂硯齋重評石頭記」に付された「凡例」の中で、「いま自分は俗世に碌々として、何一つものにしたことはない。だが、ふとひるがえってその昔一緒に過ごした女性たちのこと

を想い起こして、一々細かに推しはかってみると、その行動といい、見識といい、みな自分よりも遙かにすぐれていたと思う。堂々たる男子が、かの一群の婦女子にも及ばぬとは、慚愧にたえぬことである。」といっているのも、あながち謙遜にすぎた表現ではなく、おそらくはいつわりなき實感であったかもしれないのである。

六

以上みてきたように、紅樓夢における女人崇拜の思想は、明末以後に醸成された、かような社會思潮を背景にもつものであり、そのような流れの當然の歸結であったとみることができるであろう。しかしながら、このような思潮は、當時の社會全般を蔽うほど強力なものであったのでは決してない。全體的にみれば、あくまでも鞏固な男尊女卑の時代、女性蔑視の社會であったのであり、それらの女人崇拜の思潮は、その中にあってわずかに咲き出でた可憐な花であったにすぎないのである。而してまた、そのような女人崇拜は、決していわゆる近代的な女權擴張論、すなわちフェミニズムの原義につながるものでもない。あるいは部分的に重なる面もあるかもしれないが、本質的には、それとはおよそかけ離れたものであるといわねばならない。なぜなら彼らは、女性をただひたすらに崇拜しただけであって、必らずしも女性の人權を尊重して、女性の置かれた劣惡な生活條件や社會環境などの改善を、はかろうとはしていないからである。いわば彼らの女人崇拜は、西歐中世のナイトが、女性蔑視的風潮の中で、貴婦人に對して永遠の愛を捧げたようなもので、近代的な婦女解放論に結びつくものは殆んどなかったといわざるを得ない。

それでは、紅樓夢の女人崇拜はどのような特色をもつものであるか、そしてまたそれは、それ以前の女人觀とどのような繋がりがあるのかについて考察してみることにしよう。

まず最初に、紅樓夢の主人公賈寶玉の女人崇拜は、全女性に及ぶものではなく、その對象がきわめて限定されているということである。すでに第一章において少しくふれたように、彼の崇めるものは、女性の中でも、清淨潔白な未婚の乙女に限られており、しかもおおむねは貴族の天才少女であった。それについては、寶玉がしばしば次のような言葉を發していることによって端的に示される。

女の子がお嫁に行かぬうちは、非常に高價な寶珠のようなものだ。ところが一旦嫁に行くと、どうしたわけか、よくないところがたくさん出てきて、珠ではあっても、光も色つやもなくなって、死んだ珠になる。さらに年を取ると、もはや珠ではなくなって、なんと魚の目ん玉になってしまう。明らかに一人の人間でありながら、どうして三通りにも變わるのだろうか。（第五九回）

不思議なことだ。どうしてこの人たちは一旦男の處へ嫁に行ったが最後、男の臭いに染まって、こんなに恥知らずになるのだろう。男よりももっと憎たらしい。（第七七回）

なぜ人は女の子が生まれて成人すると、必ず嫁にやろうとするのだろうか。しかも一旦嫁に行ったが最後、まるで人が變ったようになってしまう。（第百六回）

これほどはっきりと少女崇拜、處女崇拜を語ったものは、おそらく紅樓夢以前には類例がないであろう。とはいっても、このようなはっきりした形でこそなけれ、紅樓夢以前においても、これと相似た見方がなかったわけでは

ない。

紅顔易衰。處子自十五以至二十五、能有幾年容色。如花自蓓蕾以至爛漫、一轉瞬耳。過此便摧殘剝落、不可睨視矣。（衞泳「悅容編」（及時））

美人艷處、自十三四歲以至二十三、只有十年顔色。譬如花之初放、芳菲妖媚、全在此際。過此則如花之盛開、非不爛漫、而零謝隨之矣。然世亦有羨慕半老佳人者、以其解領情趣固有可愛、而香銷紅褪、終如花色衰謝之後、祇有一種可憐之態耳。（徐震「美人譜」）

這花草也、與人一樣的。人在少年、肌膚是細的、眉目是鮮明的、臉嘴是標緻的。縱是粗俗的人、到十八九、念二三、少不得要發露一遭、面龐上光彩有了、眉目間精神也足了。過了中年、男子臉上有了髭鬚、女人臉上生了摺皺、皮膚都粗起來、逐漸兒弄得白頭瘸嘴、彎腰駝背、惹人厭惡。就像花在初開、以至盛放、都是少年人的光景、到花謝葉落、與人到老來、無異。（快心篇第二集第九回）

これらの例をみてもわかるように、當時においては、女性が珍重されるのは、その美が光りかがやく乙女の間であって、あとはおおむねお拂い箱とみなされるのが、一般的風潮であったのである。紅樓夢の女人崇拜の思想も、當然のことながら、このような美學を基調にし、それをいよいよ深化させたものであるといえよう。すなわち、紅樓夢の女人崇拜の特色は、女性に「人間」としての全人格的尊嚴を認めたものとはいい難く、少しく極論すれば、それは、女性觀賞のいささか變った形という域を、脫したものとはいえないのである。スタンダールの「戀愛論」によれば、戀愛は、㈠情熱戀愛　㈡趣味戀愛　㈢肉體的戀愛　㈣虛榮戀愛　の四種類に分けられるのであるが、こ

の分類に從えば、紅樓夢の戀愛は㈡の趣味戀愛の範疇に入るであろう。「金瓶梅」は㈢の肉體的戀愛に當り、「牡丹亭還魂記」には㈠の情熱戀愛の氣味がある。これらに比較した場合、紅樓夢は、やはり趣味戀愛に入れるのが最もふさわしいと思う。趣味戀愛とは、またの名を美的戀愛、觀賞的戀愛、審美的戀愛などともいうが、要するに美術品や骨董品を玩賞するように、美人を「物」として眺める戀愛のことである。紅樓夢の登場人物にはそれぞれに個性があり、主人公と對等に「人格的」にわたりあっているではないかといわれるむきもあるかもしれないが、しかし紅樓夢にはあらゆる障害を乘りこえて突き進む情熱戀愛のはげしさもなく、また肉體的戀愛のもつ淫亂な快樂の追求もない。ただ冷やかで纖細な諦觀的な戀愛の情調があるばかりである。このような趣味戀愛の系譜は、中國には古くから存在するけれども、しかしこれが非常に發展し最高度に整備されて、中國的戀愛の一大特色となったのは、明末以後であると私は思う。このような戀愛觀（美人觀）は、明末以後、衛泳の「悅容編」、李漁の「閒情偶寄」（聲容部）などに體系的に述べられているが、それは次のような言葉からも窺われるであろう。

有一篇議論道得好、說那眞好色眞愛色的一種至情、原非淫佚、又念美色、實非惡物、直若以美色比之珍寶、試想珍寶、豈是惡物。（快心編第二集第九回）

王子猷呼竹爲君、米元章拜石爲丈、古人愛物、尙有深情、倘得美人而情不摯、此淑眞所以賦斷腸也。故喜悅則暢導之、忿怒則舒解之、愁怨則寬慰之、疾病則憐惜之、他如寒暑起居、殷勤調護、別離會晤、偵諷款談、種種尤當加意。（悅容編「鍾情」）

このように當時の人は美人を得がたい「珍寶」として愛するのであるが、その愛し方は熱情的に愛するのではな

く、あくまでも冷やかに「憐」「惜」し、「調」「護」するのである。「物」のうちでも、彼らは美人をしばしば「花」にひきくらべて賞玩し愛惜するのであるが、それは當時の人が、花を美人とともに、この世における最も優美なものと考えていたからであり、それゆえに花をいとおしむがごとく、美人を愛惜するのである。これについては、すでに前稿「紅樓夢と花」で述べたことがあるので省略するが、紅樓夢の女人崇拝も本質的には、えがたい珍寶や名花を愛するのと同じ立場でなされているのである。ただ紅樓夢の場合は、「物」として輕々しく取扱うのではなく、女人を世にもまれな尤物とみなして、この上もなく大事に取扱うという點で、いわばこの時代の趣味戀愛の極北に立つものであり、その最高傑作となりえているということができる。しかし結局のところ、このような女人崇拝が近代的なフェミニストの戀愛觀と相容れることのないのは言うまでもない。

さらにまた、紅樓夢では、そこに登場する美女たちを、この世の人ではなく、天上界の人とみたてて崇めていることも、紅樓夢の女人崇拝の特色をなすものであるということができるであろう。今日からみれば、「天地秀靈の氣を鍾めた美女」というのさえ、かなり浮世ばなれした考え方であるが、絶世の美女は天界より降凡投胎した仙女であって、この世の人ではないとみる考え方のほうは、さらによけい現實ばなれしているといえるであろう。しかしこのような考え方は、中國には古くから存在し、仙女崇拝の發展とともに次第にふくらみ、後世になればなるほど普遍的に行なわれたのである。絶世の美人に對ったとき、たとえば「嫣然一笑坐生春、信是天人謫居此」（瞿佑「安榮美人行」）とうたうように、この當時、美女はこの世の人ではなく、謫仙女とみなされ、しばしば「天人」・「天上人」・「天女使」などと形容されたのである。周知のごとく紅樓夢の美女たちは、天界から降謫された者たちで

あるから、紅樓夢における女人崇拜も、歸するところこのような天女崇拜に通じるものがある。寶玉が愛した世にもあらぬ佳人たちは、この世における人間臭い日常的存在としての女ではなく、ほんの一時この世に謫されている天界の仙女の化身にすぎなかった。彼女らはこの地上において、しばしの間、花が咲き匂うように妍を競ったのち、やがて忽然とまた天界へ歸り去ってしまうのである。しかしながら、このような非人間的、非地上的存在の女人たちを、精神的崇拜の對象としてあがめることが、果して近代的ないみの女性尊重といえるかどうかは、問わずとも明らかであろう。

以上、紅樓夢の女人崇拜の特色を述べ、あわせてそれらがそれ以前のさまざまな女人觀をふまえて形成されたものであることを指摘した。明末における、女性を淫蕩な情欲の對象とみなす無制限な情性の解放も、清代に入ると、政治社會の變化などもあって、次第に抑壓され、抽象的觀念的な女性美追究へと向わざるを得なくなった。そして、それがやがて紅樓夢のような、いわば一種獨特のプラトニックな觀賞戀愛ふうの女人崇拜の文學を生んだのである。しかしそれらは、しばしばいうように、近代的なフェミニストの女性觀とは大きな距りがある。だが、このような封建的な戀愛觀や女人崇拜にはまた、それなりのよさがあり、紅樓夢はそのような封建的美學をもっとも麗わしく結實させたものであるといえよう。

（一九八三、八、一）

註

（1）以上の叙述については、伊藤漱平氏「李漁と曹霑、その作品に表はれたる一面―愛の相をめぐるある喜劇と悲劇についての覺書―」（島根大學論集人文科學六、七）、その他を參照した。

（2）黃霖・韓同文選注「中國歷代小說論著選」上四七四頁「臥閑草堂本儒林外史」回評の注①に、「評者對吳敬梓頗了解、對揚州的風俗也相當熟悉、可能是作者的親友」という。

（3）謝希孟に關する後世（紅樓夢以後）の資料としては、「宋艷」卷一警悟類（詞苑叢談を引く）、同卷五狂妄類（豪譜を引く）、宋詩紀事卷五五、全宋詞四の二二六八頁、宋元學案補遺卷五五、同卷七七（本事詞を引く）、宋人軼事彙編卷十六、黃巖縣志卷三九（雜事軼事）などがあげられる。これらのうち、宋人軼事彙編、黃巖縣志の記事がやや詳しく、他は殆んどみな斷片的なものである。

（4）無名氏撰（風月主人書と題するものもある）の「人中書」（風流配）は、清初（一六五〇ころ）嘯花軒寫刻本。「風流配」・「自作孽」・「狹路逢」・「終有報」・「寒徹骨」などを含む。劉廷璣（康熙の人）の「在園雜志」卷二にみえる「近日之小說、若平山冷燕・情夢析・風流配・春柳鶯・玉嬌梨等類……」ということばからも、この小說が清初のものであることがわかる。

（5）「名媛詩歸」三六卷は、王士禎の居易錄によれば、坊賈が鍾惺に託名して刊行したものであるといい、四庫提要もその說を支持しているが、いずれにしても明末萬曆刊本であることは疑いない。

（補記）本篇を書き完えたのち、廖仲安氏に「紅樓夢思想溯源一例―〝天地間靈淑之氣只鍾于女子〟一語的出處和源流」という短文のあることがわかった（光明日報、一九七七、十二、三）。引用資料も少ないし、また私とは見解も異なるが、小論の一部と重なるところがあるので、一應ここに紹介しておく。